# 天理参考館所蔵植民地期木製ケロの分析概報
## ―　蛍光 X 線分析結果を中心に　―

荒田　恵（天理大学付属天理参考館）
青木智史（天理大学付属天理参考館）

天理大学附属天理参考館は約 32,000 点におよぶ世界各国の民族資料を所蔵しており、植民地期木製ケロはそのなかに含まれる。当館所蔵のケロは大まかに 2 タイプあり、多彩色の顔料で人物や動植物などのモチーフを描いたものと、点描で金属象嵌を施したものに分けられる。当館はそれぞれ 17 点と 7 点所蔵しており、前者については小型の資料 3 点が含まれる。

植民地期木製ケロについては多くの先行研究があるが、顔料で彩色された資料の研究が大半を占めている。この彩色ケロはスペイン征服以降つくられるようになり、16 世紀から 18 世紀にかけてペルー南部およびボリビア高地でつくられたことが分かっている。木製ケロは征服以前のインカ帝国期において重要な儀礼用具のひとつとして用いられたが、それらには様式化された幾何学文様が彫刻されているだけで、当時の世界観をうかがい知ることは難しい。そのため、多彩色の顔料で様々なモチーフを描いた植民地期の木製ケロは、植民地期に生きた先住民が征服以前のアンデス社会の記憶を物質化したものとして、モチーフの図像解釈に主眼が置かれて研究されてきた。近年では、彩色に用いられた白色顔料の成分分析をもとに、植民地期のごく初期に、二酸化チタンおよび二酸化ケイ素から構成される白色顔料から塩基性炭酸塩（いわゆる鉛白）へと変化することが指摘されるなど、異なる視点の研究成果が報告されている。

このような研究動向を踏まえ、当館所蔵の彩色ケロのうち保存状態が良好な資料について図像解釈を行い、さらにセット関係が確認された資料について顔料の蛍光 X 線分析を行った。また、金属象嵌が施された資料についても同様に蛍光 X 線分析を行った。その結果、白っぽい顔料の多くに鉛が含まれ、象眼された金属がスズであることが明らかになった。本発表ではこれらの分析結果を詳細に報告し、植民地期における鉱山開発について触れながら木製ケロの総合的な考察を行う。

チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区 E3-1 南の石列について

伊藤伸幸（名古屋大学）

チャルチュアパ遺跡では、2000 年から名古屋大学を中心として考古学調査を実施している。主な目的は、先古典期文化の解明である。2012 年からはエル・トラピチェ地区で発掘調査を開始した。エル・トラピチェ地区は先行研究から先古典期前期から先古典期後期にかけての遺構・遺物が知られている。2012 年からの調査では、主に先古典期後期の考古学資料が得られた。そのなかで、エルサルバドル最大の建造物 E3-1 の南から発掘された石列について発表する。

チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区では、エルサルバドル最大の約 24m の高さを誇る E3-1 建造物がある。2012 年からの発掘では、その南側から、東西方向にのびる石列が検出された。この石列はイロパンゴ火山噴火による降下火山灰層（TBJ）の下から検出されており、先古典期後期と推定される。

石列の方向は、E3-1 建造物の建築のための基線とは、ほぼ 90 度をなしている。また、先に出土したジャガー頭部石彫の更に南に位置している。一方、更に南にある E3-2 建造物と E3-3 建造物はこの石列よりも南にあるが、この石列がつくられた時期には存在していないと考えられる。

ところで、フラスコ状ピット 3 基がエル・トラピチェ地区で検出されている。検出された場所は、E3-1 建造物の西側である。また、フラスコ状ピットと E3-1 建造物の間からは、前述の石列から北方向にのびる石列が検出されている。この南北方向の石列は、石の建造物の一部であった可能性が高い。また、E3-2 建造物北側では、円筒形状のピットも検出されている。

以上のことから、先古典期中期に建造された E3-1 建造物は、その後、石列と石の建造物で区画された地域を聖なる区画とし、それよりも外側の地区で世俗的な生活を営んでいたと考えられる。本発表では、チャルチュアパ遺跡で最も早い時期に記念碑的な建造物を建築し、その周りを整備したエル・トラピチェ地区の調査から、聖なる空間と俗なる空間について検討する。

ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡から出土した動物骨資料について

清家大樹（聖マリアンナ医科大学）
渡部森哉（南山大学）

南米ペルーの中央高地、フニン高原で紀元前 4000 年頃に家畜化されたリャマやアルパカといったラクダ科動物は、現代のアンデス社会では荷駄利用や獣毛利用が主であり、食用には余りされない。しかし、家畜化の過程を含む先スペイン期の遺跡から出土したラクダ科動物骨にはしばしば解体痕がみられる。また、ラクダ科家畜は豊穣と繁栄の象徴とされ、先スペイン期のアンデス社会においては、しばしば儀礼において犠牲にされ、また儀礼に伴う饗宴において食されていたと考えられている。

発表者らはこれまで、ペルー北部高地の幾つかの遺跡について、動物種や部位構成などについて概要を報告してきた。これまでの調査では、ペルー北部高地ではカハマルカ中期、とりわけワリ帝国の行政センターであるエル・パラシオ遺跡のラクダ科動物骨資料が特に多く、主要分類群の動物骨の 9 割以上を占めていることが分かった。なお、本遺跡では種まで同定できた動物骨が 13,574 点（破片総数 21,430 点）、そのうちラクダ科動物骨が 13,119 点出土している。これはペルー北部高地を通時的にみても、ラクダ科動物を利用し始めた時期である形成期や、それよりも後の時期のカハマルカ後期・晩期の遺跡と比較してもかなり高い値である。このことから、エル・パラシオ遺跡で活動をしていた人々は、ラクダ科動物を特に選択的に利用していたことが示唆される。またエル・パラシオ遺跡では、墓や奉納儀礼を行ったと思われる場所など、儀礼的コンテクストから動物骨が出土している。先スペイン期の行政センターにおける動物利用と儀礼行為との関係について考える上で、儀礼的コンテクストからも動物骨が出土していることは特筆すべき点である。

そこで本発表では、ペルー北部高地に位置するカハマルカ中期の遺跡、エル・パラシオ遺跡から出土した動物骨資料について、主に儀礼的コンテクストから出土した資料を中心に報告を行う。

パコパンパ遺跡周辺の地質のストロンチウム同位体比調査
―ラクダ科動物飼育地域の再検証―

瀧上舞（山形大学）
鵜澤和宏（東亜大学）
關雄二（国立民族学博物館）
Daniel Morales Chocano（ペルー国立サン・マルコス大学）
米田穣（東京大学）

ペルー北部高地に位置する形成期の神殿パコパンパ遺跡（1200-400 cal BC）では多くのラクダ科動物の骨が出土している。これまでの同位体分析では、形成期後期前半（700-400 cal BC）にラクダ科動物の飼育が開始されたことが明らかとなった（Takigami et al., 2019）。シカやクイの同位体比の分布や、埋没地の汚染を受けた象牙質資料との比較により、ラクダ科動物には少なくとも 3 箇所の飼育地（Sr 同位体比の低い値のグループ：87Sr/86Sr 0.706 1±0.0014 、中間的な値のグループ、高い値のグループ：87Sr/86Sr 0.7107±0.0016）が遺跡周辺に存在していたと推測された。しかし、パコパンパ遺跡の動物骨が示すストロンチウム同位体比は非常に多様な値を示しており、パコパンパ遺跡周辺の飼育地の推定を疑問視する声もあった。発表者らは、遺跡周辺の地質構造の複雑さ、様々な時代の層が存在することを根拠にラクダ科動物の同位体比の多様性を解釈していたが、遺跡周辺での地質の Sr 同位体比を確認する必要性も認識していた。

そこで 2018 年度の夏期調査において、遺跡周辺の半径 20km の範囲内で地質の同位体比を反映している現生の植物を採取した。24 地点において計 50 点の植物を採取し、これまでに 22 地点 35 点の分析を終了した。分析の結果、植物の Sr 同位体比は、パコパンパ遺跡の動物骨と同じく、非常に多様な値を示した。それらの植物のうち、遺跡上で採取された植物と、遺跡の麓の村で採取された植物の値は、Sr 同位体比の中間的なグループと高いグループの値に一致した。このことから、遺跡周辺のラクダ科動物の飼育地は 3 地域ではなく、2 地域にわけられると再解釈できる。またその地域は低い値のグループ(87Sr/86Sr 0.706 1±0.0014)が遺跡の北・西・南側に位置し、新たに定義された高い値のグループ(87Sr/86Sr 0.7102±0.0021)が遺跡の東側に位置することが示された。本研究により飼育地のグループ分けは訂正されたが、パコパンパ遺跡周辺での飼育という結論は変わらずに支持された。

ペルー北高地・クントゥルワシ遺跡出土オマキザル資料の再分析

鵜澤和宏（東亜大学）
瀧上舞（山形大学）
關雄二（国立民族学博物館）
井口欣也（埼玉大学）
米田穣（東京大学）
大森貴之（東京大学）

ペルー北部高地の形成期神殿、クントゥルワシ遺跡（1800BC-50BC）では、1990 年代の発掘調査によって２個体のシロガオオマキザル（Cebus albifrons）が出土した。2010 年に炭素・窒素安定同位体比分析をおこなって食性を推定したところ、C4 植物の摂取が示され、飼育されていた可能性が示唆された。しかし人為的管理の実態や個体の由来については不明であった。過去 10 年における分析手法の発展によって、出土個体のライフヒストリーをより詳細に復元できるようになったことから、ストロンチウム同位体比にもとづいて個体の生息域の変化、すなわち個体の移動過程を推定した。また、炭素・窒素安定同位体比分析についても再度測定をおこなって野生個体と比較した。

ストロンチウム同位体比の結果から、すくなくとも２個体中１個体（94KW-B-S）はクントゥルワシ遺跡周辺とは異なる地質環境のもとで誕生し、幼少期（第二後臼歯の形成期）に生息地を移動、犬歯が形成される頃にクントゥルワシ遺跡近郊でヒトの管理下におかれ、ことのき C4 資源を与えられたことが推定された。もう１個体（99KW-C-8）については分析できる歯牙が残存しておらず出生地域についての考察はできないが、C4 資源を摂取していた可能性が強く示された。今回の再分析により、野生のシロガオオマキザルが遺跡から離れた場所で捕獲され、生体のまま神殿に運ばれて一定期間飼育されていたことが確認された。

なお、野生のオマキザルの分布域はアンデス山脈からアマゾンに広がっているが、ペルー北部からエクアドルにかけては、一部、海岸にまで分布している。クントゥルワシ出土個体のストロンチウム同位体比は、アンデス東側地域に特徴的な高いストロンチウム同位体比から大きくはずれており、アマゾン側から連れて来られた可能性は否定される。北海岸に生息する動物の比較可能なストロンチウム同位体比が報告されていないため、結論は保留せざるを得ないものの、北海岸由来の可能性が高まった。

# エクアドル、セロ・ナリオ遺跡とロマ・デ・ピンシュル遺跡の発掘

山本睦（山形大学）
フアン・パブロ・バルガス（エクアドル・クエンカ市考古課）
オスカル・アリアス（ペルー国立サン・マルコス大学）

エクアドル南部に位置するカニャル谷は、エクアドル考古学において最も重要な場所の一つとされており、古くからさまざまな考古学調査が実施されてきた地域でもある。そのなかでもセロ・ナリオ遺跡は、1922 年に先鞭がつけられて以降、様々な研究者によって調査が実施されてきた。そして、これまでの調査の結果、セロ・ナリオ遺跡では、ナリオ早期（紀元前 1500－500 年）、ナリオ後期（紀元前 500－紀元後 500 年）、カニャリ（紀元後 500－1460 年）、インカ（紀元後 1460－1532 年）の活動が存在したと考えられている。そのなかでもとくに、ナリオ文化とも称される形成期（ナリオ早期）の物質文化は、エクアドル南部を代表するものの 1 つである。その特徴としてあげられるのは、精巧な土器とウミギクガイを含む貝製品であり、エクアドル南部地域だけでなく、ペルー北部との交流も示唆される。

その一方、セロ・ナリオを含むエクアドルの形成期研究のかかえる大きな問題として、精緻な編年が構築されていないことがあげられる。また、エクアドルとペルーでは用いる編年が異なっており、地域間の関係を考察するためのデータはまだまだ不十分である。
そこで、2019 年より、エクアドル南部の形成期の指標遺跡ともなっているセロ・ナリオ遺跡で 3 週間の発掘調査を実施した。また、それと並行して、同じカニャル谷にあり、事前の踏査でセロ・ナリオと同時期の活動があったと考えられたロマ・デ・ピンシュル遺跡でも発掘調査をおこなった。この 2 つの遺跡は、谷を挟んで向かい合う自然の丘陵上に位置しており、互いに視認できるような関係にある。

本調査の主目的は、両遺跡、そしてカニャル谷における形成期編年の精緻化である。本発表では、2019 年におこなった発掘調査の概要を示し、上記 2 遺跡の関係性について予備的な考察を報告する。

ペルー、ワヌコ盆地ビチャイコト遺跡第一次発掘調査速報

金崎由布子（東京大学）
ダニーロ・デパス（ワラス大学）
大谷博則（ポマバンバ郡行政府）

ワヌコ盆地ではこれまで、盆地北部を中心に調査が行われてきた。ビチャイコト遺跡は盆地の南部一帯を見渡せる丘陵上のマウンド遺跡であり、当遺跡の調査は盆地南部の考古学的状況を解明する糸口となる。本年の調査の結果、ワイラヒルカ期（形成期前期）及び「ビチャイコト期」の二時期の立地利用の詳細が明らかになった。

当遺跡は、近年細分化されたワイラヒルカ期編年における後半期から利用が開始された。この時期に、岩山の傾斜部分に石を詰め、石壁で段状に整地した基壇建築が造られた。地山の最も高い部分からは、母岩直上に形成された複数の円形炉が検出され、この高さを基壇最上段の床面の高さとして基壇が形成されたと考えられる。基壇は大きく二時期に分けられ、一時期目の円形基壇を一回り大きな円で囲むようにして基壇が拡張されていた。

「ビチャイコト期」は発表者らが新たに設定した時期区分であり、搬入土器の特徴から、イゲーラス期（地方発展期）より新しい時期の可能性が高い。当時期の壺型土器は基本的に暗色を呈し、土器の器形がより豊富である。ワイラヒルカ期の建築の上に分厚い灰層が敷かれ、その上に長方形の部屋が造られた。灰層には多量の土器、獣骨、骨角器等のほか、広域の交流関係を示す外来の遺物が含まれていた。またワイラヒルカ期の壁の一部を再利用した、完形土器や銅製品を伴う複数の埋葬が検出された。

これらの結果は、盆地南北の政治的景観が長期にわたり異なっていた可能性を示す。ワイラヒルカ期の自然地形に沿った円形基壇や、基壇の建設・拡張に土を盛らず石を多用する建築方法は、先土器期の建築を多量の土で埋めた上に新たな基壇を作り、垂直方向の基壇拡張を伴う北部のものとは性質を異にしている。また「ビチャイコト期」の土器・建築は、北部の調査ではこれまで発見されておらず、遺跡分布に南北で偏りがあった可能性がある。今後、本成果を踏まえた更なる調査の実施により、このような地域景観の形成プロセスの解明を目指す。

図 1　ビチャイコト遺跡出土銅製品

チュパ遺跡の測量調査

土井正樹（山形大学）

中期ホライズン（AD650-1,000）に栄えたワリ国家は、ペルー中央高地のワリ遺跡を首都として現在のペルー山岳部および海岸部に広く影響を及ぼしたと考えられている。かつてはこのワリ国家の成立の要因として、ティティカカ湖沿岸に栄えていたティワナク国家からの宗教的影響が有力視されていた。しかし近年の調査資料の蓄積により、ワリ国家の前身である山岳部のワルパ社会が、同時代にペルー南海岸に存在したナスカ社会と交流しその文化要素を取り込んだことが、ワリ国家の形成を促したと考えられるようになってきた。

ナスカ社会末期の土器様式がそれまでの規範から大きく外れるようになることから、ワルパ社会とナスカ社会の交流のあり方として、一般にワルパ社会の南海岸への進出が想定されてきた。それに対し発表者は、ナスカ社会の人々の山岳部への移動が両者の交流の活発化を引き起こしたのではないかという仮説を提示したことがある。

このように、ワルパ文化にナスカ文化の要素が現れる要因については対立する見解が存在する。この問題解決のためには、ワリ国家が出現する直前期の山岳部と海岸部の人々の交流の実態を明らかにすることが必要である。その手がかりが得られる可能性があるのがチュパ遺跡である。この遺跡は標高 3,390m の地点に位置し、ワリ遺跡が存在する地域とペルー南海岸のちょうど中間地点にある。一般的な集落遺跡と考えられるこの遺跡からは、カハ様式と呼ばれる山岳部系の土器に交じり、ナスカ文化の土器が出土している。カハ様式はワルパ文化とも関わりがあり、ワルパ社会の人々とナスカ社会の人々がそこで接触していた可能性もある。この遺跡の調査により、ワリ国家が出現する直前期に、ペルー中央高地の人々と南海岸の人々がどのように接触していたのかを解明することを目的とし、チュパ遺跡における調査プロジェクトを開始した。本発表では、この遺跡で 9 月に実施した測量調査について報告する。

図　チュパ遺跡の位置

中央アンデス南部において剃髪はトランスジェンダーの標識たりうるか？

佐藤吉文（国立民族学博物館）

ティワナク様式とされる１つの肖像土器が大英博物館に所蔵されている。斑文をあしらったゆったりとしたローブを纏う「女性」を象ったものだ。しかし、この人物には「女性らしからぬ」点がある。ひとつは口元に唇飾りの装着穴を備えること。ティワナクの肖像土器において唇飾りは女性よりも男性に特徴的だからだ。もうひとつは長髪を左右に垂らしながら、頭部中央を剃り上げた「逆モヒカン」であること。これもまた、ティワナクの「女性」表現としては唯一である。本発表は、こうした身体的変工とアンデスのジェンダーの関係について考察するものである。

征服期アンデスの民にとって頭髪や髪型が社会的、政治的シンボルであったことは、クロニカに記録されている。インカの時代、一般に頭髪は長く伸ばされ、髪を短く刈りあげることがインカの特権ですらあった。そうしたなか、女性の髪は、近しい者の死への弔意を示す際には切り落とされるべきモノであり、「公娼」と口をきいた女性に対する懲罰として、その「同類」とみなされた末に公衆の面前で刈り落とされるべきモノであった。寡婦や娼婦は、アンデスのジェンダーにおいては本来備えるべき対の一方を備えない存在であり、刈られた頭髪は、その人物が社会的にリミナルな状態へ移行したことを社会的に示す標識であったともいえる。

一方、唇飾りも単なる男性性の表象とは言い難い。唇飾りで知られるチリ中北部のエル・モジェ文化複合では、装着者が男性でもごく一部に限られ、なおかつほかとは異なって暴力的経験を生きたことが報告されているからである。

これまでのところ、考古学的に「刈られた頭髪」という造形表現は若干例が知られる程度で、当該人物の実像にせまる資料は乏しい。剃髪とジェンダーや、社会的地位との相関関係については注意深い検討が必要である。しかし、視野をアメリカ大陸全土の神話に広げると、剃髪と性別的変身という要素の間におぼろげな相関があることが見えてくる。

# プロジェクト・クロニカ・メヒカーナ（PCM）の進展と現状

井上幸孝（専修大学）
クレメンティーナ・バトコック（メキシコ・国立人類学歴史学研究所歴史研究部）
ベレニセ・ブラーボ・ルビオ（メキシコ・国立人類学歴史学学校）

プロジェクト・クロニカ・メヒカーナ（Proyecto Crónica Mexicana, 略称 PCM）は、『クロニカ・メヒカーナ』（以下、『CM』）の複数の写本をウェブ上で公開することを目的とし、2016 年 11 月に始まった。報告者 3 人が中心となり、専修大学、国立人類学歴史学研究所（INAH）、国立人類学歴史学学校（ENAH）の共同作業の末、2019 年 7 月にウェブページの一般公開を開始した。本調査速報では PCM の意義と現時点までの進展について報告する。

『CM』は、16 世紀末にメシーカ王家の末裔のアルバラード・テソソモクがスペイン語で書いたとされる歴史書である。テノチティトランの正史といえる内容で、メシーカ王家のイデオロギーを反映する貴重な史料であると同時に、植民地時代初期の先住民社会を如実に映し出す史料でもある。『CM』には複数の写本が伝えられており、本プロジェクトによってこれら写本の参照が可能となり、原文の参照や異本間の照合が飛躍的に容易になる。さらに、近年、植民地時代後半から独立後における古代史の利用という研究テーマが注目されており、写本公開はこの分野の研究にも大いに貢献する。

具体的な作業としては、メキシコの国立総合文書館（AGN）、国立人類学歴史学図書館（BNAH）、テキサス大学とのやり取りを行い、各写本の画像を入手した。AGN 館長や BNAH 図書館長とのやり取りを経て画像公開の許可を得る一方、ブラーボを中心に転記を進め、これまで 2 種の写本の画像の一部と転記したテキストすべてを公開している。転記テキストはページ毎に PDF 化し、本文の写真と対照して見られるようなプラットフォームを構築して専修大学の HP 上に置いた。加えて、この分野の専門家の書下ろしの論考 8 編を PDF 形式で掲載するとともに、その大半は Radio INAH の協力で音声ファイルの形でも聞くことができるようにした。テキサス写本については現時点で未公開だが、マイクロフィルムを日本でデジタル画像化した後にメキシコで転記作業を行っており、現在はこの写本の転記テキストの全文公開に向けた作業を進めている。

謝辞：本プロジェクトの実施に際し、H.29～30 年度 JSPS 科研費「古代アメリカの比較文明論」（代表 青山和夫、JP15K21760）、R.元年度専修大学研究助成個人研究「『クロニカ・メヒカーナ』の分析および写本の研究用ウェブページ作成」（代表 井上幸孝）の助成を受けた。

図１：　PCM トップページ（https://www.senshu-u.ac.jp/research/mexicana/）

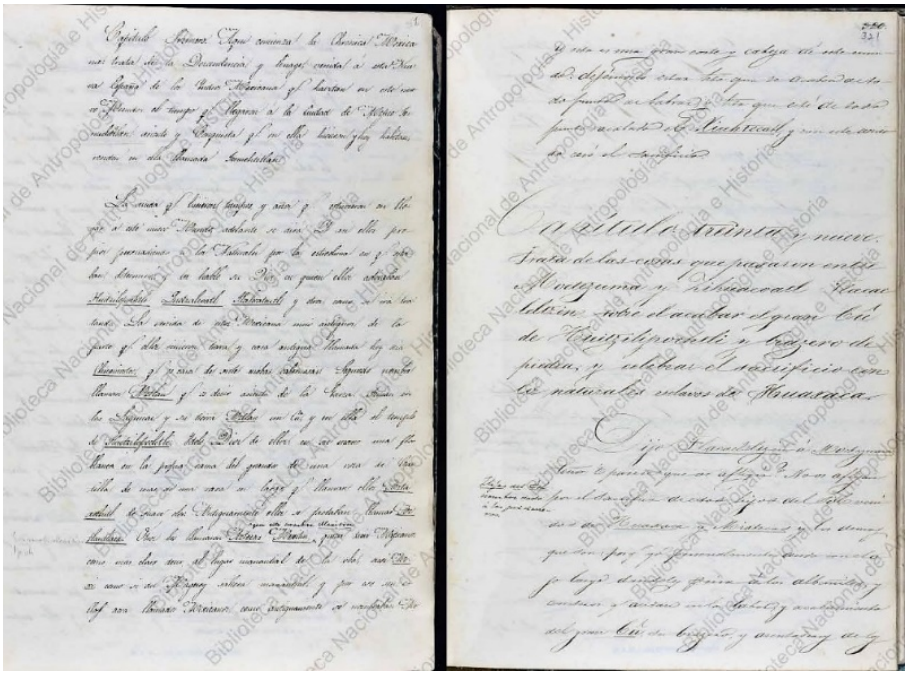


図２：　原文の画像（BNAH 写本）

# 「シカン」という用語使用に関する諸問題

松本剛（山形大学）

現在、日本やアメリカで広く「シカン」の名で知られている考古学的文化は、かつては様々な名で呼ばれていた。この文化のものと考えられた遺物群が多く出土したペルー北海岸の土地の名にちなんで、ウーレは「エテン」と呼び、ラルコ・オイレは「ランバイェケ」と呼んだ。また、アンデス考古学の初期の段階においては、この文化に属する遺物の多くは正しく認識されることなく、チムーやインカなど、他の考古学的文化のものと混同されることが多かった。博物館の収蔵庫は出土コンテクストが不明な遺物で溢れかえっている。高度な冶金技術で知られるこの文化は、精巧な土器だけでなく、たとえば広く知られている「黄金のトゥミ」のように、多くの傑出した金属製品を生み出し、盗掘者たちの格好の標的となったためである。

こうした編年上の混乱を収束させたのが、島田泉によるワカ・デル・プエブロ・バタン・グランデでの調査であった。長く継続して居住されたこの遺跡での調査は、後期モチェ期からチムー=インカ期までの土器様式の変遷を詳細に記録することを可能とした。しかし、これによって編年の混乱は収束したものの、別の新たな混乱がはじまった。それは、島田がこの文化に「シカン」という新しい名前を与えたことに起因する。この名前は「月の家（もしくは神殿）」を意味する古代ムチック語にちなんだものである。「シカン」は本来、ペルー北海岸の北部のいくつかの場所に存在したと言われる「聖なる基壇」やそれらの「集合体」を指す言葉だった。ひとつはヘケテペケ下流域のパカスマヨ、もうひとつはグアダルペ、そしてもうひとつはラ・レチェ中流域のポマ地区にあったと言われる。島田は、本来いくつもあった基壇群の名前を（１）文化全体、（２）最盛期の中心地、（３）土器編年におけるフェーズに与えた。

島田が「シカン」の名を与えるまで、現地では「ランバイェケ」の名で呼ばれており、ほとんどすべての研究者がいまでもそう呼んでいる。編年混乱の収束により、正しく認識されるようになった「ランバイェケ文化」は「シカン文化」が指すものとまったく同一のものであり、二つの名前は必要ない。むしろ異なる二つの名前があることで、初学者に誤解を招いている。また、「ランバイェケ」の名前を使い続けている現地研究者たちが、島田による「前・中・後期シカン期」の三時代編年を受け入れつつも、「シカン」の部分を「ランバイェケ」と入れ替えて、「前・中・後期ランバイェケ期」というまったく新しい用語で編年を論じるようになってきている。つまり、二重の改名が行われるようになり、事態は混迷を極めている。さらに近年、島田がシカンを命名した当時のシカン社会観にそぐわない新しいデータが続々と発表されている。本来、古代の地名であった「シカン」を文化の名にまで押し上げて使用する背景には、その名前を持った場所の一つ（ポマ地区のシカン遺跡）が、当時の中央集権的な社会の唯一最大の中心地であったという想定があった。ところが近年の考古学データは、当時の社会はより権力分散型で、河谷ごとに異なる政体があった可能性さえ示唆している。したがって、当時の社会をシカンと呼ぶことの学問的土台にも異論が唱えられはじめている。

本発表では、こうした新しい混乱を収束するためにいくつかの提案を行う。

# インカ表象・太陽神・錬金術

大平秀一（東海大学）

「太陽神」は、インカ表象の中枢を織り成す要素の一つである。「インカ帝国」の国家宗教としての「太陽神」は、インカをめぐる語りにおいて、およそ 500 年もの間、生産・消費され続け、現在にいたっている。無論その源泉は、クロニカに求められる。

クロニカにおけるインカと「太陽神」の関係性への言及は、メナ（無名の征服者）、ヘレス、エステーテらの征服者によって、「発見」・「征服」の直後（1534～1535）にすでになされている。以後スペイン人の記録において、「太陽神」は一貫して言及され続け、その記述内容は肥大化していく。17 世紀初頭には、先住民のワマン・ポーマ（c.1613）やパチャクティヤムキ（1613）も、記録の中に太陽の図を示し、インカの「太陽神」が可視化されるようになる。

しかし、先住民の宗教・儀礼的世界に直接触れて著された偶像崇拝根絶運動の報告書では、「太陽神」をめぐる記述は極めて限定的となる。先住民の語りがケチュア語で書き留められた「ワロチリ文書」（c.1608）では、それを聞き取ったアビラ神父に誘導され、無理やり語らされており、その末に「太陽のワカは低地のパチャカマックの次に位置づけられていた」と述べている。また考古資料には、神殿装飾・壁画も含めて、ポーマやパチャクティヤムキの描く「太陽神」の表象はまったく認められず、「太陽神」の存在を明瞭に確認することはできない。近現代の民族誌においても、「太陽神」に関する情報は採取・記述されたことがない。17 世紀～20 世紀の先住民の語りでは、「太陽の息子（娘）」、「太陽の子」、「夫は太陽」といった表現が認められるものの、これは「父親（夫）が誰なのかわからない」という意味をもつメタファーとして使用されている

一方で、16～17 世紀にスペイン人・ヨーロッパの人々が、アンデス以外の地域に関して書き残した記録をみると、やはり「太陽神」・「太陽の館（太陽神殿）」の記述が認められる。ヘルメス思想・錬金術的思想では、太陽は力・エネルギーの源泉であり、時には神そのものとも捉えられ、黄金で象徴される。太陽は力と支配の能力を授け、その子供たちの代表者は、君主や支配者とも捉えられていた。ローマ教皇のアレクサンデル 6 世（在位 1492～1503 年）は、教皇庁内の部屋にあった「太陽の子供たち」という絵の中に自身を描かせている。こうした状況より、「太陽」をめぐる信仰・特異な観念は、むしろヨーロッパ社会・文化と深い関わりを有していた可能性が示唆される。

ヨーロッパにおいて、東方世界のヘルメス思想とギリシャ・ローマの知性が混淆し合って発展し、ルネサンスに隆盛をみた魔術・魔術的思想・錬金術・占星術における「太陽」・「太陽神」の意味には、インカ表象との深い関連性をみてとることができる。ワマン・ポーマやパチャクティヤムキが可視化した太陽神の図像も、そのソースは錬金術の書物に求められる。本発表では、16 世紀に入り、異端・異教の取り締まりの渦に巻き込まれて、社会の表層から地下に押し込められた、ヨーロッパの基層文化としての魔術思想・錬金術が、インカ表象に与えた影響を考察する。

# テオティワカンの星空
## ―時空間を司る神獣たち―

丹羽悦子（南山大学）

本研究の目的は、古代都市テオティワカンの夜の自然景観を復元し、古代人はこれをどのように認知していたのかを考察することにある。特に都市から見えた星空に着目し、夜の景観と時空間の認識について議論する。

自然景観を考察する先行研究は、主に昼間に見える周辺の山々や、東西の地平線上の太陽や特定の星の出没について言及されてきた。また、都市の建築方位軸や巨大建造物の配置関係から、都市全体が象徴的空間を表していたと解釈されている。一方で、景観については夜という時間帯と空という空間も考慮する必要があると指摘されている。

このため本研究では、考察を進めるにあたり考古天文学の先行研究において指摘されている問題点に留意しつつ古代の星空を再現し、夜と空の景観を観察した。次に、民族誌史料が存在するアステカ時代の星の記録およびテオティワカンの考古遺物や図像の解釈から考察を行った。

この結果、都市で物質化されている複数の神獣の形が、夜の空の景観として星座のように復元された。星空の神獣は東西南北および天上‐地上－地下という空間の中を時間とともに動くため時空間の指標と基準になり、季節や祭祀と結び付く景観として古代人に観察されていた。また星空の神獣の象徴については、都市で物質化された神獣との共通性が見られた。時を司り権力となるヘビ、死と再生のために戦う猛獣類、暦の始まりを示す巨大ワニや水源・豊穣を生み出す大地怪物という観念体系と社会との結びつきが見られた。

結論として、テオティワカンの星空には時空間を司る神獣たちが存在し、自然景観として古代人が目にしていたのではないだろうかと指摘する。また考察を進める中で、この星空の神獣が太陽や月、惑星、天の川などとともに都市の象徴的空間に設計当初から取りいれられていた可能性が示唆された。今後の課題として、古代の世界観の実体にさらに近づくために星空の神獣と都市の方位軸との関係に着目し、より実証的に解明していきたい。

# メキシコ中央高原における社会変化と環境変動

福原弘識（埼玉大学）
原口強（大阪市立大学）
米延仁志（鳴門教育大学）
鹿島薫（九州大学）
北場育子（立命館大学）
大森貴之（東京大学）
檀原徹（株式会社京都フィッション・トラック）

発表者らはメキシコ中央高原における環境変動と社会史を実証的に解明するため、人間活動の痕跡が増加する過去 3000 年間に対象を絞り、メキシコ合衆国、プエブラ州サン・ルーカス・グランデに所在するチャウトラ湖においてコアサンプリング調査を実施し、サンプルの分析をおこなっている。メキシコ市があるメキシコ盆地ではいまだ部分的に残存する湖での調査を中心として環境変動史の復元が試みられているものの、パトラチケ山脈を東側に越えたプエブラ州側には環境史データを豊富に含む湖沼が少なく、古環境復元の試みは活発になされてこなかった。そうした中、プエブラ州北西部に位置するチャウトラ湖は、過去数千年間に及び噴火活動を繰り返してきたポポカテペトル火山の北東約 30km にあり、西側のイスタシワトル山やトラロック山を由来とする水系に属し、更には先古典期から古典期にかけて繁栄したトラランカレカ遺跡の東約 5km に位置し、メキシコ中央高原の社会変化において重要な役割を担ったプエブラ州北西部の環境変動史データを内包している唯一の湖である。

環境変動は様々な要因によって誘発されるが、紀元後 1 世紀頃とされるポポカテペトル火山の噴火はメキシコ中央高原の社会変動に対して大きなインパクトを与えた。この火山噴火は大規模な人口移動と先古典期社会崩壊の引き金となり、プエブラ盆地の人口の 30%が減少し、被災を免れたチョルーラやトラランカレカで人口増加と都市の拡大が起きた。人口移動の全てを自然災害に帰することはできないが、国家成立直前のメキシコ中央高原社会が不安定な自然・社会環境を背景としていたことは明らかである。

本発表では、火山活動とその影響、その間の環境変動史と社会的影響を明らかにすることを目的に、2019 年におこなったサンプルコアリングとその分析経過について報告する。

# エクアドルの土器出現前後における生業活動の変化

鹿又喜隆（東北大学）
アンドレイ V. タバレフ（ロシア科学アカデミシベリア支部考古学民族学研究所）
アレクサンダー N. ポポフ（ロシア・極東連邦大学）
ボリス V. ラジン（ロシア・極東連邦大学）
ホルヘ G. マルコス（エクアドル・沿岸工科大学）

エクアドルの先史文化においてReal Altoは1970年代に調査された記念碑的遺跡である。現在も博物館を併設する史跡公園として保護されている。筆者らは、2014・2015・2017年にReal Alto遺跡を、2017・2018年にLoma Atahualpa遺跡を発掘した。そこでは、先土器時代と思われる文化層が確認され、その上層にバルディビア土器文化層が検出された。特にReal Alto遺跡ではバルディビアⅠ・Ⅱ期の文化層であったため、土器出現前後の活動の変化を探るのに適した資料であった。一連の発掘では、両遺跡から複数の埋葬人骨が検出された他、豊富な土器や石器、動物遺存体、岩偶、土偶、石製品などが出土した。調査チームでは、これらの資料を対象に多角的な分析を進めているが、本発表では特に土器と石器の機能の変化を理解することで、土器出現の前後における生業活動の変化を推察したい。Real Alto遺跡のバルディビアⅠ・Ⅱ期の土器には煮沸時の煤やオコゲが付着しており、年代測定と共に安定同位体比分析を実施し、その機能を推定した。Real Altoの付着炭化物に基づく土器出現年代は、従来の説よりも新しく、4600BP頃であり、更なる他遺跡での分析が必要となった。そのため、Loma Atahualpa遺跡の発掘が実施された。また、両遺跡の石器のほとんどは剥片石器であり、高倍率法を用いた石器の機能研究をおこなった。剥片石器の機能については、これまで殆ど実施されていなかったため、本研究の成果は当該地域の剥片石器の製作と機能の関係に、一定の評価を与えることが出来る。土器や石器の機能的変化は、当時の集落形態や生業経済の変化と連動しており、エクアドル先史文化を物語る上で重要な情報である。

# なぜピラミッドは倒壊しないのか
## ―観念の変容による技術革新の誕生―

嘉幡茂（京都外国語大学）
フリエタ・ロペス（メキシコ国立自治大学）
村上達也（テュレーン大学）

メキシコ中央高原（図１）の形成期から古典期社会への変化は、テオティワカンにおける国家の出現を代表例として、社会の階層化、集約農耕の発展、交易網の発達、ピラミッドの巨大化といった特徴に認められる。しかし、同時にパラダイム・シフトが起こったことにも注目する必要がある。ポポカテペトル火山（後 70 年ごろ）、チチナウツィン火山（後 125 年ごろ）、シトレ火山（後 275 年ごろ）の噴火は、大きな社会的混乱を招いた。そして、かつて信じられていた価値体系は見直される必要に迫られた。

古代メソアメリカ文明では、世界は三層（天上界・地上界・地下界）から成り立ち、これらに住む神々や精霊や先祖と交信し、彼らからの超自然の力を得ることで、地上界の平和が守られると信じた。この三層を連結する場所が、各地域にランドマークとして存在する山であり、その中でも水源を確保できる山が「水の山（Altépetl）」として信仰の対象となった。この思想は、形成期中期以降、水源のある地点にピラミッド型建造物を建造することで物質化されていった。つまり、ピラミッド型建造物は「水の山」のレプリカであり、各界の神々と交信する舞台として建造された。そして、社会の紐帯を強固にする目的で、「水の山」信仰の強化とその物質化が実践されていった。

しかし、古代人は、神々は水や風や雨といった自然現象のみではなく、噴火に象徴される火にも宿ることを理解した。地上界に壊滅的な破壊をもたらすことを知り畏れた。これが価値体系の刷新に繋がる。

人々は、神々や先祖とより密接に交信し、より強力な超自然の力を獲得するため、ピラミッド型建造物をより大きく高く建造し始めた。ピラミッドは、古代の摩天楼である。この建造には、当時の最新テクノロジーが採用されていたと考える。建築資材の品質改良や耐震性に優れた内部構造の開発（技術革新；図２）が必要不可欠であったに違いない。本発表では、これについて「トラランカレカ考古学プロジェクト（2012 年～現在）」から得られたデータを基に議論する。

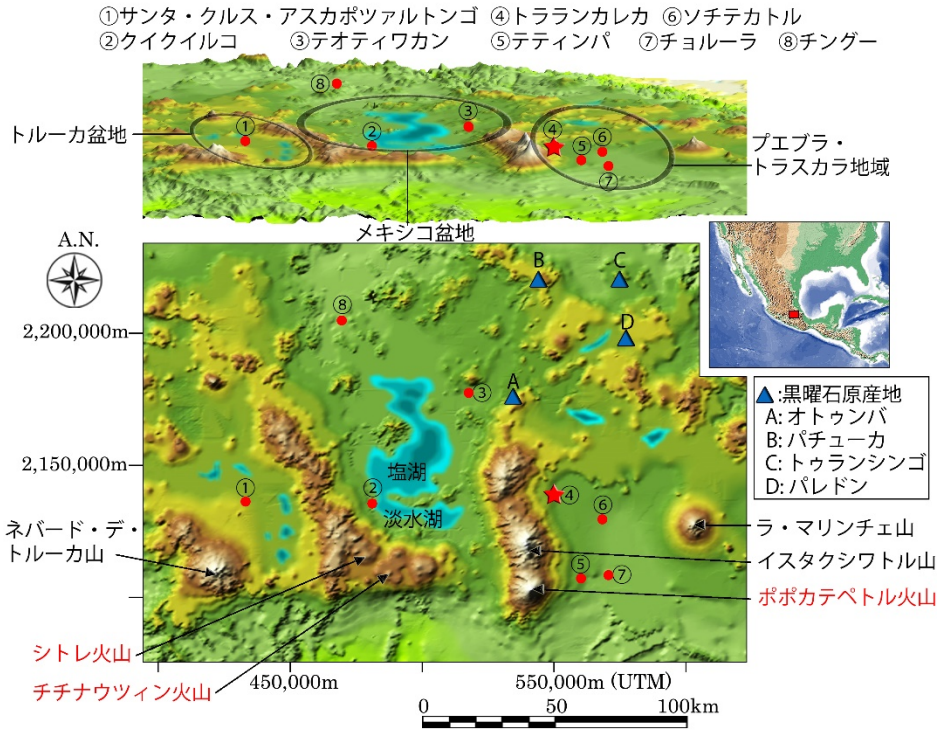



図１　メキシコ中央高原の地形図

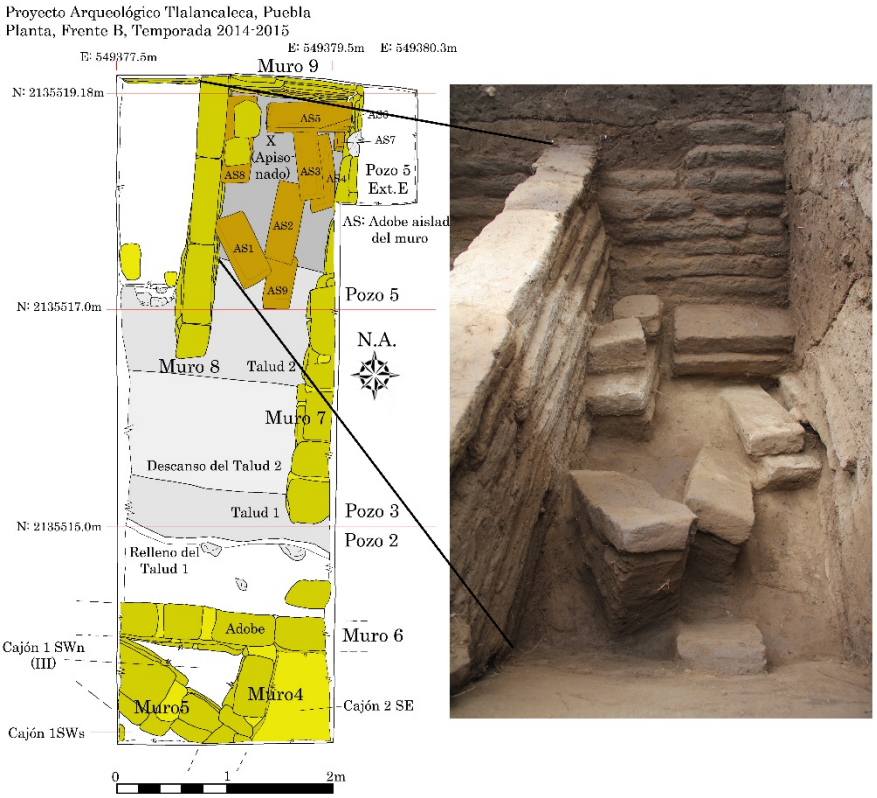



図２　建造の技術革新と考えられる日干しレンガを用いた建築工法（Sistema constructivo de cajón con adobes）

# チャンカイ様式の高台付碗形土器

市木尚利（立命館大学）

本研究発表は、チャンカイ様式（紀元後 11 世紀から 16 世紀）の「高台付碗形土器」（以下、高台付碗）の観察と分析結果をまとめたものである。

この様式の土器は、南米ペルー共和国のアンコン及びチャンカイ河 谷中・下流域を中心に分布している。高台付碗の器形そのものは、中期ホライズン（紀元後 7 世紀から 11 世紀）のアンコンやチャンカイ河谷に起源を持つものではない。中期ホライズン以前から、カスマ以北の海岸や山岳一帯で発展した様式群の高台付碗との関連を見なくてはならない。

アンコンやチャンカイ河谷中・下流域では、高台付碗は、後期中間期に製作・使用され始め、時期を経るに従って広く普及していった。

この器形の製作及び使用の開始と定着は、中期ホライズンから後期中間期にかけて起こった南北間の交流とその変容を反映するものである。例えば、チャンカイ様式で高台付碗の普及と連動するように、ワリ拡大によって普及したワマンガ様式の碗が衰退した現象等が挙げられる。高台付碗の研究は、様式変化 を考える重要な課題の一つなのである。

先行研究から、中期ホライズン以降、北部の社会文化的影響が中央海岸まで及んでいたことが知られている。

しかし、具体的にどのような影響がみられたのかを物質文化から研究したものはまだまだ数が少ない。チャンカイ様式の土器においても、北部に由来する器 形が多くみられ、北部で発達した土器様式との関係を検証していくことが必要である。

近年、注目される研究の一つに、ガブリエル・ラモンの「技術様式」研究がある。ラモンは、民族考古学の調査研究とその成果を踏まえて、古代における土器製作は、移動する工人が担ってきたのではないだろうかと仮説を立てた。器形や図像文様の外見の要素では、工人の出自を特定することができない。土器様式間で技法やその行為を比較分析することで、出自を特定できると考えた。そして、土器製作に使用される道具や製作行為の研究を進める必要性を説いたのである。

現在まで、土器製作の道具と断定できるものの出土が少ない。型は多く出土しているが、それ以外の道具となると不明なものが多い。また、類似の道具が出土してもどのように使用されたかには地域差があったと考えられる。道具の使い方まで含めた行為までを射程にいれた基礎研究となるとまだまだこれからである。

本研究で分析の中心となる高台付碗についても、このような視点からの基礎研究が不十分なため、他地域で、高台付碗を含む様式との比較研究を行うための基準が構築されているとは言いがたいのが現状である。従って、土器の器面に観察される成形や調整などの痕跡に焦点をあてた分析も不可欠になってくる。

そこで、土器の類型、製作過程、成形及び器面調整技法、技能の巧拙、図像文様を中心に基本的特徴や多様性を明らかにし、今後の展望と課題をえていくことが本発表の目的である。

中期ホライズン期の社会動態
―ペルー北部の事例―

渡部森哉（南山大学）

中期ホライズン期（後 600-1000 年）はワリ帝国が台頭した時期と言われる。しかし、ワリの支配を裏付ける建築や土器などの物質文化の希少性から、ワリの帝国モデルに反対する研究者、支配の範囲や程度を限定的に捉える研究者もいる。

本発表ではワリは帝国であったか、あるいはその支配のあり方はどのような性格であったのか、という問題設定はしない。代わりに、中期ホライズン期はどのような時代であったのか、その時代にワリはどのような役割を果たしたのか、について考察する。

2006 年に発掘調査を実施したヘケテペケ川中流域のパレドネス遺跡では、ティワナク様式の土器が発見された。この事例を大きな枠組みで理解するために、2008 年から 2012 年までカハマルカ盆地にあるエル・パラシオ遺跡を発掘した。同遺跡がワリ帝国の行政センターであることが判明したが、ティワナク様式土器は出土しなかった。一方でパレドネス遺跡ではワリ様式の多彩色土器は出土していない。2019 年にはさらに考察範囲を広げるため、ヘケテペケ川中流域の、パレドネスよりも海岸方向にある遺跡テルレン＝ラ・ボンバを発掘した。建築様式や埋葬形態の特徴にワリ文化の要素が認められるが、出土土器の中にはワリ様式土器はほとんど含まれない。装飾土器の中で主なものは海岸カハマルカと呼ばれる土器群であり、カハマルカ盆地の Cajamarca Floral Cursive、Cajamarca Red Painted も出土する。また、チムー前期の土器、シカン中期の土器も出土した。一方で、Cajamarca Black and Orange などは確認できていない。こうした土器のタイプの組成と建築様式の特徴から、中期ホライズンがどのような時代であったかを考察する。

重要なのはパレドネス、エル・パラシオ、テルレン＝ラ・ボンバ、のいずれも中期ホライズン期に建設が始まり、中期ホライズン期に放棄されているという事実であり、その前後に利用された痕跡はない。これは、ペルー北海岸のサン・ホセ・デ・モロ遺跡などで、モチェ後期から Transicional 期にかけてワリ様式の土器がカハマルカ様式の土器とともに出土する事例、つまり既存の遺跡に組み込まれる形でワリ様式の遺物が現れる事例とは異なる。このことを説明することは、ワリ帝国の性格と連動していると思われる。なぜ放棄されたかを説明することは難しいが、遺跡が使用されていた時期にどのような物質文化があり、それがのちの時代にどのように継承されたのかが一つの手がかりとなる。チムー様式土器やシカン様式土器は後期中間期に国家として成立した社会で用いられた土器である。その土器がすでにヘケテペケ川中流域で見つかることはどのような意味があるのか。また海岸カハマルカの土器は中期ホライズン期に製作が始まるが、国家社会の主流の土器とはならなかったが、シカン社会の中で使用が続けられた。こうした土器の動きに着目して中期ホライズンの終わりについて考察する。

# イニシエーションとしての移住
## ―『第二クアウティンチャン絵図』に描かれた四つの試練―

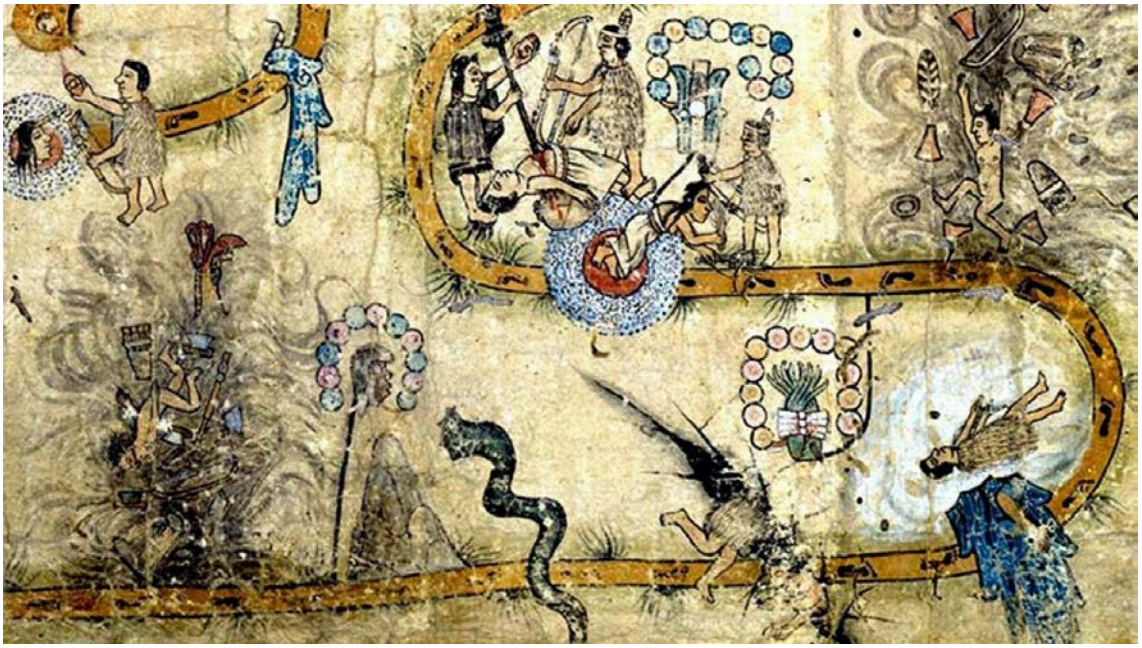
岩崎賢（南山大学）

本発表ではメソアメリカの宗教的伝統を理解する上で重要な史料である『第二クアウティンチャン絵図（El mapa de Cuauhtinchan núm.2)』をとりあげ、その内容について概観したのちに、その中のある個所に描かれている一連の興味深い図像について、宗教学的な視点から考察を行いたいと思う。

『第二クアウティンチャン絵図』は、スペイン人による征服直後の 16 世紀初頭に、現在のメキシコ・プエブラ州のクアウティンチャンにおいて作成された史料である。アマテ紙で作られたこの絵図は、縦１メートル×横２メートルほどの大きさで、赤・青・黒・緑などの顔料を用いて、様々な人物・動物・植物・自然物・儀礼・村落・神殿などの絵が描かれている。その基本的なストーリーは、「起源の地・チコモストク」を出発した祖先たちが、様々な驚異的な出来事を経験しながら放浪を続け、やがて「偉大なる神聖都市・チョルーラ」にたどり着き、最終的にその近くに定住地としてクアウティンチャンの町を創設する、というものである。

16 世紀の高原中央部の諸先住民集団にとって、自分たちの祖先がどこか遠いところからやってきて、長い放浪の後に現在の場所を共同体の居住地として定めた、という物語はよく知られたものだった。例えば、メキシコ盆地を中心にアステカ王国を作り上げたメシーカ人の移住物語が描かれた史料として、『巡礼絵巻（ボトゥリーニ絵文書)』など十数点の史料が存在する。プエブラ州においても『第二クアウティンチャン絵図』のほかに、『第一』、『第三』、『第四』のクアウティンチャン絵図が存在するほか、内容的に『第二』と共通する部分が多い『トルテカ―チチメカ史（Historia tolteca-chichiemca)』などの史料も存在する。

さてこの『第二クアウティンチャン絵図』は、従来は、共同体の土地や資源をめぐる訴訟などの際に用いられる「対外的」な性質の文書と考えられていた。しかし近年ではそれは、共同体のメンバーに、自分たちの共同体の起源は祖先たちが経験した神秘的な出来事に満ちた旅にあることを教えるための「対内的」な道具として作成された可能性が高い、と考えられるようになってきている。クアウティンチャンの祖先たちのチコモストクからチョルーラまでの驚異的な旅は、この図絵の左半分に描かれているが、その中でとくに興味深いのは、図絵の左下の辺りに描かれた「つむじ風」、「大地の裂け目」、「洪水」、そしてもう一つ「つむじ風」の、四つの図像である（図版参照)。発表者は、これらの図像群は、メソアメリカの先住民がイニシエーション（通過儀礼）の中で経験する一連の試練と関係するのではないかという観点から、メソアメリカの巡礼やシャーマニズムに関する研究を参照しつつ、その隠された意味に接近してみたいと思う。



マヤ後古典期ペテン・イツァ湖周辺における派閥を探る

白鳥祐子（日本学術振興会　特別研究員 PD）

本発表では、スペイン人によって征服された中米最後の先住民都市タヤサルの発掘調査をもとに、最初のスペイン人との接触から征服されるまでの 175 年もの期間、都市を存続し続けたイツァ族について発表する。

グァテマラ、ペテン・イツァ湖周辺では 16 世紀から 17 世紀にかけていくつかの家系グループが居住していたが、その中心は現在フローレス島と呼ばれるペテン・イツァ湖に浮かぶ島であった。スペイン人による記述からその地域は主にイツァ族が居住していたと考えられていた。しかし、歴史学者の研究により、イツァ族と思われていた集団はいくつかの異なる家系や派閥によって構成されていることが明らかとなった。ペテン・イツァ湖南西側を治めるイツァ族と、北東側を治めるコウォ家が主に対立関係にあり、スペイン人の史料によれば両集団・両家系ともユカタン半島から移住してきたとスペイン人に語っており、ユカタン半島北部の言語、ユカタン・マヤ語を話していたとする。

タヤサル遺跡は、イツァ族の首都タイツァ（現フローレス島）の北対岸にあり、ペテン・イツァ湖に突き出したタヤサル半島の西部に位置する。イツァ族の首都、現フローレス島は人口が密集し行政も置かれているため大規模の発掘は難しい。一方で、フローレス島から北 200mに位置するタヤサル半島はイツァ族領内の中で最も首都に近く、イツァ族の物質文化を調査するのに適している。調査の目的は、タヤサルに居住していたイツァ族の物質文化を明らかにし、タヤサルに居住していたイツァ族がどの派閥に属していたのかを探ることである。本調査では、ペテン・イツァ湖周辺遺跡の発掘、出土した遺物の比較検討したのちに、中性子放射化分析による土器の胎土分析と、ポータブル蛍光 X 線分析による黒曜石の産地同定を実施した。

タヤサル遺跡の発掘調査は、先行研究から後古典期後期（1250-1525 年）の居住が確認されている祭祀建造物周辺のグループ 23 と区分された地域を中心に行った。発掘調査の結果、祭祀建造物群の配置と住居址構造において、イツァ族と対立していたコウォ家の遺跡で確認されたものとの差異が明らかになった。この調査では住居址から二つの埋葬が確認され、先行研究で確認されている埋葬と合わせて 4 つの埋葬に共通する埋葬様式が確認された。これはタヤサル遺跡特有の埋葬形態であり、他のイツァ族遺跡でも例がない。

胎土分析の結果、タヤサル遺跡と首都タイツァ出土の土器はどちらも同じペテン・イツァ湖周辺の胎土を使用していたことが分かった。しかし、首都タイツァの土器の胎土は粒子が細かく、より精製されていた。この結果から、都市ごとで異なる土器を使用していたことが明らかになった。黒曜石の産地同定では、タヤサル遺跡のグループ 23 区域ではイシュテペケ産が多いが、他の区域では異なる産地（サン・マルティン・ヒロテペケ、エル・チャヤル）が優位であった。この差異は黒曜石の獲得戦略による結果であると推測される。建造物、土器、黒曜石にみられる差異から都市内における派閥の存在が指摘できる。

古代アンデスの笛吹きボトルのデザインと製作技術の研究
ークピスニケ、ワリ、チャンカイの資料をふまえてー

真世土マウ（岡山県立大学）
鶴見英成（東京大学）
森下矢須之（BIZEN 中南米美術館）
山花京子（東海大学）

古代アンデス文明は多様な器形の土器を産み出したが、器内の空気の動きにより内蔵された笛が鳴る「笛吹きボトル」を多数遺したことが特徴的である。発表者らはその構造と製作技術を研究してきたが、本発表では新規に分析した資料を加え、人間工学的な視点からのデザインの検討と、焼成を含む製作技術について提示する。

真世土・鶴見・森下は 2018 年までに、BIZEN 中南米美術館、東京大学総合研究博物館、東京大学駒場博物館の収蔵品の中から笛吹きボトルの事例を抽出し、エクアドルのチョレーラ文化とバイーア文化、ペルーのビクス文化、ナスカ文化、チムー文化の資料について分析し、製作プロセスと構造を解明した（古代アメリカ学会第 23 回研究大会にて発表）。その分析方法とは、X 線 CT によってボトルの内部形状を測定し、3 D プリント、インダストリアル・クレイ製、陶製のレプリカを制作し、再現実験を行うことであり、鳴る音を重要な要素として着目している。笛吹きボトルには多様な構造があり、その造りによって音の強弱のリズムや倍音が発生し、さらにドーム状の響鳴室で音質が変わるなど、技巧的な音色が鳴る事例が多いのである。

2019 年、東海大学文明研究所所蔵の笛吹きボトルの X 線 CT 分析を進めていた山花と協力し、それまでの分析資料に、ペルーのクピスニケ文化、ワリ文化、チャンカイ文化の事例を加えた。それをふまえ、本発表ではさらなる分析の成果を提示する。第一にボトルのデザインの人間工学的な分析であり、これは形状の多様性と使用方法の背景を論じる糸口となる。第二に製作技法の中でも、とくに焼成についての考察である。土器の野焼きの研究は、気候風土に根ざした燃料、焼成時間や温度などの技術の分析を要するが、とくに笛吹きボトルの場合、焼成技術が鳴る音と深く結びついていると考えられる。これらの問題設定により、笛吹きボトルの分析手法と視点の幅が広がるであろう。

（左より）クピスニケ文化、ワリ文化、チャンカイ文化の笛吹きボトル土器
（東海大学文明研究所所蔵：資料番号 11571－347、9983－173、11571－703）

# ペルー、ワヌコ市の文化財と住民
## ―コトシュ遺跡をめぐって―

鶴見英成（東京大学）
藤井龍彦（国立民族学博物館）

ペルーのワヌコ市周辺の考古学調査はもっぱら日本の調査団が進めてきた。1960 年のコトシュ遺跡発掘では、先土器時代末期の神殿の代表例である「交差した手の神殿」を発見するなど、全国でも地域レベルでも注目される成果を挙げた。また一帯で多数の遺跡を登録し、69 年には市街中心部のシヤコト遺跡を発掘した。それらの成果がその後、市民にいかに受け止められてきたか、調査した結果を提示する。

1960 年代の調査の直後、71 年に調査団長を記念する街路命名や記念碑建設などを市が実施したが、約 30 年の長きにわたり調査は実施されなかった。2001～02 年にハンカオ遺跡などの踏査やサハラパタク遺跡の発掘が行われたが、市民の大きな関心は集めなかった。さらに 15 年後、鶴見が 2016 年よりコトシュ遺跡とハンカオ遺跡の再調査に着手した。この間、2010 年に元コトシュ調査団員による発掘 50 周年講演会、13 年に「交差した手」レリーフのレプリカ展覧会、2016 年以降は鶴見の企画する再調査成果報告会等が行われた。

藤井は 2012～14 年に「ワヌコ市民にとってのコトシュ」をテーマに社会調査を行い、2016～17 年にも市内の学校で生徒たちにアンケートを実施した。その結果、1960 年代の調査成果へのワヌコ市民の受け止め方は、「持ち去られた交差した手は黄金でできていた」という誤解に見るように、30 年の空白を経て大きく変容したことが判明した。当時は周辺住民が遺跡を忌避したため作業員を遠くの村で雇ったこと、文化財保護法が曖昧なため「交差した手の神殿」の埋戻しが不十分で何者かにレリーフが壊されたこと、調査団が遺跡周辺に野営したため市職員や知識人以外の住民との関係が薄かったこと、調査後に出版された英文の学術報告書が市民に普及し得えなかったことなどが要因である。またコトシュに関心が集めるあまり、それ以外の遺跡群が重要視されず荒廃を招いた。改めて市民に向けた情報発信が必要である。